湘南医療大学　ティーチング・ポートフォリオ

大学名　湘南医療大学
所　属　保健医療学部看護学科
名　前　城戸滋里
作成日　2025/05/28

1.　教育の責任　584 字

私城戸滋里は、2025 年度に赴任し、現在携わっている科目は、1 年次生の必修科目である看護学概論、看護基礎ゼミ、看護基盤実習 I、および 2 年次生の必修科目であるナーシングプロセス I、ナーシングスキル学 II である。また、1 年次生のチューター役割も担っている。看護学概論では、看護学を学ぶ初学者にとって必要な、世界から日本における看護の歴史的変遷から看護とは何かを理解し、その後登場する各種看護理論家の理論とそれに至る考え方を把握することで、看護学の長年の推移、および看護過程が理解できる。また、看護学の重要な要素となる人間、環境、健康、看護を踏まえながら、現代日本における看護制度や看護教育の経緯、および看護にまつわる法律、倫理、管理を教授している。

看護基礎ゼミは 1 年次生のチューターにより教授される特色ある科目で、新入生と共に当該科目を一緒に受講しているような新鮮な気持ちで関わっている。看護基盤実習 I は老人福祉施設を担当する予定であり、学生が利用者様の生活とその支援の見学から、看護の対象である人間を考える機会としたいと考える。

また、ナーシングプロセス I では、今後受講予定の看護基盤実習 II で、学生が受け持つ患者様への看護をスムーズに考えられるべく看護過程演習を進めている。それと同時進行で実施しているナーシングスキル学 II で、看護技術演習を受け持っているが、1 年次のナーシングスキル学 I に引き続き、2 年次前期では注射・点滴・経管栄養・吸引等の高度な技術へと進み、看護基盤実習 II に備える学生への支援を行っている。

2.　私の理念・目的

1)　私の理念

私の教育の理念は、自分で考え行動できる学生を育てたいということである。看護学を主体的に学び、基本の大切さを把握した上で、応用を考えられること、状況判断ができる柔軟性を身につけられる学生を育てることである。これは過去に大学でとりわけ優秀であった学生が、卒後頭打ちになっていく姿を幾度となく目撃していることにある。評価を気にして自己の考えを広げられず、良い点数を取ることが目標になってしまうと、卒後の現状に柔軟に対応できにくいと思われるからである。

2)　私の教育目的

私の教育目的は、丁寧な教育と、手をかけすぎない学生支援で早期自立を目指すことである。下地となる教育は丁寧に行うが、その中で考えさせるヒントをできるだけ多く出すために、看護学概論の中でも可能な限り臨床での事例を提示しながら授業を進めている。その中から、学生個々が看護を感じ取り、自分ならどう考えるか試行錯誤しながら受講してもらいたいと考えている。学生には、失敗を恐れず何度でもチャレンジできる精神を持つことが必要と考える。最近では、人間関係が希薄で失敗を恐れる学生が増えており「心が折れる」などという表現でそれ以上の要求にストップをかける傾向が見て取れる。学生のうちの挫折は成長の糧となり、

就職後の精神力に大きく影響していくものと考える。そのためには、学生個々の考えを尊重しつつ自信をつけ、良い方向に導くことが必要であり、学生にとって教員のポジティブな言葉はとても重要で、その後の自立に役立つと思っている。

3) 理念をもつに至った背景

私は文系の大学を卒業後、社会人を経験した後に看護教育を受けた。そこで、実感したのは看護教育カリキュラムの過密さと、臨地実習時間の多さであった。昔の教育と言えばそれまでだが、一つひとつ考える間もなく教員の指示のもと、臨地実習でほとんどの看護技術をこなしており、社会生活をしてきた経験も生かせず、自分の立ち位置にも迷う日々であった。しかし、就職先の病院環境はリベラルで、看護師が自分で考え責任をもって看護を実践する風潮があり、医師やコメディカルとも連携する文化があったため、言われた通りにするだけが良い看護ではなく、患者に発生している問題を抽出し、何ができるかを考え、他者と協働する事の大切さを経験できた。その後、教員になってからもこの病院で行った臨地実習でも、学生個々の考えを生かした学修を展開することができたことが背景にある。

3. 教育の方法・戦略

私の教育方法・戦略は、自分で考え行動できる学生の育成である。そのためには、この 4 年間で自分にとって看護学を学ぶことの意義を明確に捉え、疑問は探求し、実践を重ねる度に成長していける学生を育むことが大事だと考えている。そのためには、教育目的でも述べたように、講義等の折に触れ、臨床場面と看護学を融合させられるような事例を提示し、看護学の学修を通して将来の自分の姿を想像できるように導くことと考える。

初学者であっても臨地実習を通して様々な看護場面に触れ、実践を重ねることで、自分が何を大切に看護したいのかを感じ取ることができると考える。その積み重ねが看護観を培うことへとつながるのだと思っている。さらに、その看護観を支援し、悩んだ時に立ち返ることができるためには、学生の思いに応じた看護理論を提示するのも教員の役割と考え、実践している。

具体化している方法：教授方法、授業の工夫、看護論の定時

4. 学習成果

1) 前任校では、それまで関連性がありながら別々に教授されていた看護技術教育と心身機構の教育を統合し、学生にとって関連しやすくする工夫を行った。前者は基礎看護科学演習、後者は基礎看護科学として科目名にも関連性を持たせ、なおかつ午前に基礎看護科学で解剖生理学的な知識やそれにより生じる症状の根拠を学習後、午後は基礎看護科学演習でそれに関連する看護技術を演習するといった流れで、看護技術の根拠をより理解しやすいように工夫した。

また、看護技術教育については、新カリキュラムから実質演習時間が減少したこともあり、本学でしようしている manaba に類似した教育支援システムを導入し、教育が全看護技術を実演

した動画をいつでもどこでもスマートホンやパソコンで確認できるシステムに変更した。このため、演習前に内容を正確に確認できるようになり、学生が課外にて練習する良い機会となったことを受けて、学生が予習してきた実演の実施から開始することとし、看護技術演習でのデモンストレーションを廃止できた。

2) 前任校では、卒業を目前にした 4 年次生を対象に、様々な看護技術を再度トレーニングできるシステムとして、看護技術自己研修週間を提供し、開催時間には誰でも何度でも看護技術トレーニングができるように、担当教員がついての個別指導も実施した。

3) 本学赴任後に担当している看護学概論は、入学したばかりの 1 年次生が初めて看護に触れる科目でもある。そのため、看護とは何かという問いに応えられるように、世界や日本における看護の変遷から看護の4つの要素、看護理論家の各種理論、看護に関わる法律、倫理、管理などを享受している。しかしながら、臨床場面を知らない初学者が看護を理解するためには、できるだけかみ砕いた説明とイメージの付きやすさが必要であると考える。臨床現場等の具体的例を多用しながら説明を実施している。また、毎回授業終了後に 10 分間の小テストを行い、内容の復習を行う事で、講義内容の再確認を行っており、次回の講義時には前回実施した小テストの迅速な返却を行っている。そこで、前回講義内容を想起させながら次の受講ができるよう工夫しており、前回小テストの解答も提示することで復習を実施している。また、毎回次回の予習ページおよび内容を提示して、事前予習を促している。

5. 改善のための努力

現在看護学概論では、看護理論家フローレンス・ナイチンゲールとヴァージニア・ヘンダーソンの理論を前期後半に学修する順序となっているが、看護基盤実習 I の前に学修しておいた方が、臨地実習での成果を考慮すると効果的ではないかと考える。この理由は、看護過程の考え方のない中で入院患者様や入所者様の生活に触れ、実施されている看護や介護を体験しても、なぜ、どうしての部分が今一つ深まらないのではないかと懸念するためである。看護師に求められる観察などの看護的視点を知った上で、臨地実習を体験することにより、臨地で生じている現象に対するエビデンスが得られやすく、その後の学修も深められると考える。そのため、来年度はシラバスの順序を検討したらどうかと考える。

6. 今後の目標

1） 短期目標：学生にとって学びやすい授業の組み立てや、実施方法について考えていきたい。今年度中には 1, 2 年次生の看護系講義全てを見られるので、年度末を達成時期としたい。

2) 長期目標：看護基礎教育を臨地にどのように反映していくのが良いのかを、長期スパンで考えていきたい。ただし、基礎教育をすべて臨地に合わせるという事ではないので、できれ

ば臨地とも話し合いながらお互いのためになる着地点を見つけたいと考える。長期スパンなので、4～5年を目途に達成としたい。

【添付資料】